鉄鉢と魚籃と

――其中日記から――

種田山頭火

青空文庫

九月三日。

曇、さすがに厄日前後らしい天候。

朝は梅茶三杯です。身心を浄化するには何よりもこれがよろしい。

前栽の萩――それは一昨年黎々火君と共に裏山から移植したもの――が勢よく伸びて、びっしり蕾をつけている。早いのはぽつぽつ咲きだしている。萩は何となく好きな花だが、それは山萩にかぎる。葉にも花にも枝ぶりにも私たち日本人を惹きつけるものがある。

このごろの蚊のするどさ、そして蠅のはかなさ、いずれも死んでゆくもののすがたである。

午前は郵便を待ちつつ読書。

ハガキ三枚、黎々火君から、十返花君から、そして珍らしくも病秋兎死君から。雄郎和尚から絵葉書と詩歌八月号清臨句集黎明、これは若狭紙を大判のまま使って、なかなか凝ったものである。

午後は近在行乞、家から家へ歩きまわっているうちに、何だか左胸部が痛むようなので、二時間ばかりで切りあげた。それでも米八合あまり頂戴している。さっそく炊いて食べる。まことに「一鉢千家飯」、涙ぐましくなる。

今日の行乞相はよかったと思う。行乞の功徳はいろいろあるが、行乞していると、自分のことも他人のこともよく解る、我儘がいえなくなる。我儘を許さなくなる。我儘をたたきつぶし

て、自他本然の真実心を発露せずにはいられなくなる。

九月四日。

宵からぐっすり寝たので早くから眼が覚めて、夜の明けるのが待ち遠しかった。

芋の葉を机上の日田徳利に挿す。其中庵にはふさわしい生花である。

小雨がふりだした。大根を播く。托鉢はやめにして読書に倦けば雑草を観賞する。

夕方、K君がひょっこり来庵、明日から出張する途次を立ち寄ってくれたという。渋茶をすすりながら清談しばらく、それからいっしょにF屋まで出かける。ほどよく飲んで酔うて戻って来たのは十二時近かったろう。

九月五日。

雨、だんだん晴れる。

今日は澄太君が来てくれる日だ。

待つ身はつらいな、立ったり坐ったりそこらまで出て見たり——正午のサイレンが鳴ってから、やっと懐かしい姿が現われた、Iさんといっしょに。

酒、米、醤油、酢、豆腐、茄子、何から何まで御持参だ。これではどちらがお客だか解らない。客も主人もなくなったところに私たちのまじわりがある。

名残はつきないけれど、六時の汽車へ見送る。人生はすべて一期一会のこころだ。

さて、明日は托鉢しようか、魚釣しようか、もし其中庵にスローガンがあるとしたならば――

「今日は托鉢、明日は魚釣！」

（「層雲」昭和十年十月号）

青空文庫情報

底本：「山頭火随筆集」講談社文芸文庫、講談社
2002（平成14）年7月10日第1刷発行
2007（平成19）年2月5日第9刷発行
初出：「層雲　昭和十年十月号」
1935（昭和10）年10月
入力：門田裕志
校正：仙酔ゑびす
2008年5月19日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鉄鉢と魚籃と

——其中日記から——

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　種田山頭火
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/